

幼児期に人工内耳手術を受けた聴覚障害児の自己肯定感

荒木 友希子

（金沢大学人文学類・子どものこころの発達研究センター）

◆ 目的

新生児聴覚スクリーニングテストの普及によって、聴覚障害を早期に発見することが可能になったため、1歳半から2歳頃に人工内耳手術をおこなう子どもが近年増加しつつある。侵襲性の極めて高い電極埋め込み手術を乳児や幼児に対しておこなう場合、人工内耳を装用する聴覚障害児本人の意志とは関係なく、保護者が自らの価値観や考え方にに基づき、補聴器による補聴効果をあきらめ、子どもに人工内耳を装用させることを選択することになる。保護者が子どもの人工内耳手術を選択する決断に至る過程には、ろう者がろう者のまらう文化の中で生きていくことを否定し、保護者側の健聴者としての世界の価値観を聴覚障害を持った子どもに強要することになりかねないという危惧を感じ苦悩することも多い。幼児期に人工内耳手術を受けた聴覚障害児は、保護者の選択した人工内耳手術をどのように捉えているのだろうか。本研究では、7年前の幼児期に人工内耳手術を受けて現在小学校通常学級に在籍する聴覚障害児に対してインタビュー調査を実施し、検討をおこなった。

◆ 方法

【手続き】2時間程度、遊びながらインタビューをおこなった。インタビュー内容は調査協力者および保護者から事前に許可を得た上でボイスレコーダーに録音した。調査実施者と調査協力者は過去に何度か交流があり、ラポールはとれていた。【調査協力者】小学校通常学級4年に在籍する人工内耳装用児（10歳6ヶ月、女性）。健聴の父、母、弟（調査協力者と同じ小学校3年）の4人家族。3歳6ヶ月時に人工内耳手術を実施。年少時に県立ろう学校幼稚部から私立幼稚園へインテグレート。平均聴力レベルは右耳126dB、左耳129dB。人工内耳装用閾値40dB。

◆ 結果

インタビューの概要を以下に示す（Q:質問、A:調査協力者の回答）。Q:学校の様子は。A:「英語は大好き。音楽は好きじゃない。あと図工が好き。」「中学校はろう学校へ行きたい。中学生になると勉強が大変で辛いと思う。最近思うようになった。お母さんは、ちょっとね、世界が狭くなるからって言う。」Q:人工内耳手術をして良かったと思うか。A:「手術はしない方が良かった。うるさすぎる。」「手術はちょっと怖かったから。ちょっとだけ覚えている。ベッドで寝たりしたこと。ちょっとだけ泣いてた。びっくりした。手術をする前はどいわれたかは覚えていない。」Q:もし自分の子どもが自分と同じ耳を持って生まれてきたら、自分と同じように手術をして育てたいと思うか。A:「ううん。手術はさせない。ろう学校に行かせる。そして、手話でお話をする。もし目が悪かったら盲学校に行かせる。」Q:人工内耳をつけていることを学校の先生や友達にはどのように伝えているか。A:「ゆっくりしゃべってって言う。たまに聞こえないときもある。聞こえませんでした、と言う。」Q:聞こえる友達と自分は違うと感じることがあるか。A:「ある。耳の聞こえない友達と聞こえる友達だったら、聞こえない友達の方が多い。聞こえない友達と遊ぶ方が好き。聞こえる友達だったら、私が聞こえにくいから、つままない。」Q:なぜ自分だけ聞こえないのかと思ったことはあるか。お母さんに聞いたことはあるか。A:「ない。思わなかった。大丈夫やった。お話できるし。」Q:なぜ自分だけ人工内耳をつけないといけないのかと思ったことはあるか。お母さんに聞いたことはあるか。A:「思った。聞いたことはない。」Q:聞こえない自分のことをどう思うか。A:「好き。」

◆ 考察

通常学級にインテグレートしている人工内耳装用児が特別支援学校（ろう学校）へ戻る傾向が近年報告されているが、本研究の調査協力者も2年後の中学校の進学について同様の希望を持っていた。人工内耳を装用しても軽度難聴レベルの聞き取りであるため、通常学級で健聴者の友人と関わる際にはストレスを感じる場面にも遭遇するようである。本研究の調査協力者が人工内耳手術をしない方が良かったと思っているのは、普通学校での困難さを感じていることが一因であるかもしれない。しかし、本研究の調査協力者には自分のことを好きだと思える健全な自己効力感が育っていることが示唆された。家庭では健聴者の家族と音声言語（日本語）によるコミュニケーションが十分にとれており、豊かなコミュニケーション環境の中で疎外感を感じずに成長してきたためであると思われる。